統一性を持って構成されていること。

一・私見ではあるが、十句ずつを一段落とする、二十段落の見事な構成法がとられていること。しかも、冒頭の一段落と結末二十段落は詩内容そのものが呼応関係にあるということ。

一・出典の考察の中では、詩句内容の表層部分で出典の明確に出来る中国古典籍は、「四書五経」「正史」『文選』等である。それは、文章道をきわめた「儒家」としての道真の素養を改めて浮きぼりにするものとなっている。

そして、この道真の詩の主題とも言える道真の「この詩で何を訴えようとしているか」ということに対しての私見を述べて結びとしたい。

その鍵は、［出典の分析（その二）～深層部分の投影考察～］で取り上げた、白居易と元稹らとで定着させた一百韻形式の五言排律の作品群にある。とりわけ、先学の指摘にあるように、道真のこの詩の構成法は、白居易の「東南行一百韻」、元稹の「酬樂天東南行詩一百韻」に拠るという考え方に全く異論はない。そしてその事実は谷口氏が言及する、「この「叙意」詩の形式が一百韻であることによっておのずと同形式の白居易「東南行」を踏まえて作っていることを読む者に理解させ、意識に上らせる仕掛けとなっているのである。このように元白の一百韻詩をいっぽうに置いてこの「敍意一百韻」を読むことでこの作品の性格もより明確に理解できる」(注5)の一文に尽きると考える。筆者はこの視点を更に補強できるものとして、新たに白居易の「代書詩一百韻、寄微之」からの投影関係を探ってみた。既に指摘のある「東南行」よりも更に深層部分で濃厚な投影関係があることが判明した。

筆者はその理由を次のように考える。